國の條及び、魏略（魏志所引）によりて知り得る所なりとす。而して唐書に所謂磧路なるものは、此羅布を過ぎて支那に達するものをいふなるべし。吾人はヘディン氏の探檢によりて、羅布と焉耆とを通ずる古の行軍路が、なほ跡を今日に殘せるを見る。氏は庫爾勒よりチケンリクに至るに三路あるを云ひ、一はコンチダリアに沿ふもの、二はクルクタグの麓を行くもの、三は兩者の間の砂磧の中を通ずるものとし、氏自からは其第三路によれり（圖に鎖線を以て示す）。而して是について記して曰く、「旅行中に古けれどもよく保存せられたる支那の堡塞二個と、里毎に置かれたる木と粘土とを以て作れる高き尖塔の連續せるものを見たり、これ此道が昔時コルラより或方面に通ずる重なる行軍道路なることを示すものにして、甚だ注意すべきものなりとす、道は更に南東に（チケンリクより）のびて、現今砂磧の間に沒すと雖、昔は支那の地圖に於て認むるが如く、北緯四十度二分の一の地にロプノールの位せしものなれば、思ふに此所に通じたるものなるべし。ロプの水乾きて位置を變じ、爲に此道も棄てられたるならん」と（Durch Asiens Wüsten II. S. 140-141）。此道はもとより氏の云へるが如く、焉耆地方よりコンチダリアの屈曲を避けて砂磧中を羅布に達したるものに相違なく、而してまた敦煌、玉門より來る沙中の道と相連りたるものなるべきは、殆んど疑なかるべし。漢唐以來の道は幾分か變じたるべしと雖、然も大體に於て其跡を今日に殘せるものといふを得べく、而して南北兩道の間を通ぜる此道が、單に二三の行人のみならず、實に軍隊の通路としても最も普通のものなりしを知る。余は此文書が當時の臨海頭より出でゝ其位置の一端を示し、かねて當時の支那と西域との交通路の上に書籍の記載と相待ちて一道の光明を附與するものなるを云はんとす。

されば李柏の前涼より派遣せらるゝや、所謂北道によらず、磧路を取りて焉耆に向ひ、途次羅布泊頭にありて